

昭和46年7月1日 第三種郵便物認可
平成20年7月1日発行（毎月一回）日発行
俳句雑誌 沖 第29巻第7号



俳句雑誌[おき]

7
月号

沖
発行所

前例

能村 研三

三つの乾杯

このところ俳句のパーティで乾杯の音頭をとる役が三回続いた。乾杯の音頭は長老格の方がおやりになるのが普通なのだが、まだ俳壇では若輩の私に回ってくるのは恐れ多いことである。

まず一つ目の乾杯は、松村多美主宰の「四葩」十五周年の記念祝賀会で、松村主宰の第四句集『紅葩』の出版記念を兼ねた会であった。

松村主宰は、病气から見事に回復され、お元気になられたが、『紅葩』の「紅」は勝負の色」とご自身で言われるほど句作への思いは並々ならぬものがある。

冬銀河天命はわが掌にありぬ

多美

二つ目の乾杯、六月十九日に「鴨」主宰・伊藤白潮先生の三番目の句碑が市川市の里見公園に建立された。

来歴のやうに一本冬の川 白潮

明易し窯の口火は絶やさずに
水たまり声出して飛ぶ夕薄暑

里見公園は市川市の中で最も風光明媚なところで、江戸川越しに東京

祭宮へ灯一列の連れ点り

夜のプール水中歩行の列無心

集中力裏につのり飛込台

半夏生生きることとは食べること

朝の森豆裏漉しの冷スープ

巧みな箱庭なれど音の無き

の風景が眺められる。この景色に憧れて北原白秋も市川に住んだことがあり、今回建立されたすぐ脇には白秋旧居の「紫烟草舎」が建っている。この日、白潮先生は体調を崩されて出席は適わなかったが、お元氣になられている報告があり安堵した。

三つ目の乾杯。「沖」長崎県支部に所属する「沖」の若手作家として注目されている小林奈穂さんが、北溟社の創立十五周年を記念して作られた第一回石川琢木賞・俳句部門の受賞者に決まり東京でその受賞式が行われた。賞の決定から受賞式までの時間が余りにも短かったので戸惑ったこともあったが、長崎からは奈穂さんをカルチャーで指導している荒井千佐代さん、千田編集長ご夫妻もかけつけお祝いすることが出来た。選考委員の加古宗也さんからは「沖」は次々に俳壇の賞を取っていく作家がいるとのお褒めの言葉もいただいた。

着ぶくれて話し足りないまま別る
奈穂

能村 研三



蒼茫集



花

大畑善昭

おぼろ濃くして内定の一慶事
鬢黷や花綿々と暈々と
叙歎とや田螺の道に朝日差し
牡丹活けよか師の泊りたる部屋に
飾りたる兜男の子に齒が二本
一丁歩田より田植の始まりぬ

ほたる籠

松本圭司

光るたびふと軽くなるほたる籠
念入りに明日吹く祭笛みがく
黒といふ性根をもちて兜虫
忘られてゐる気安さや麦の秋
正直にねぢれてゐたり捻り花
心まで隠すつもりサンダラス

湖の真柱

北川英子

いちだんと高層すすみぬて海市
海いろの網ごめに浮く梨の花
梨受粉うすべに刷毛のこそばゆし
急に夏東京タワー赤すぎで
噴水の以上も以下もなき高さ
日矢降りて湖の真柱聖五月

埋草

上谷昌憲

埋草を書いて蛙の目借時
激流を見下す宿の新茶かな
雲雀落つオゾンホールに触れたるか
傘閉ぢて開いて花水木通り
屋上庭園にようこそ黒揚羽
雀の子まだ天辺の風知らず

つばくらめ

藤森すみれ

つばくらめ農衣翼のごと干さる
水源の森のふくらむ鳥の恋
雲雀野に柵あり柵の朽ちてをり
沢水のご糸の先ざき田水張る
真白なる牡丹この家浮きあがる
湖は日の受け皿よ夏来たる

信濃礼讃

千田百里

あんず咲く信濃を訪はむ師碑訪はむ
信濃いま諸花盛り鳥帰る
師碑へ鍵あけて信濃は花のとき
惜春や杜のほひの句碑ほとり
海津城攻めに仕立てむ花筏
春意おのづと枅酒に藻塩かな

五月富士

遠藤真砂明

木曾の子に岳八方の雪解風
戸隠は神の男峰ぞ雪解晴
防風を掘るまなかひに夫の舟
廃船の月日かたむく花ぐもり
向き合つて一対一の五月富士
コーラスの窓を五月へ開け放つ

垂直

荒井千佐代

獣らに檻と鉄扉や桜散る
春月にたゆたふ貝か骨片か
祝婚歌弾く春スカーフの緩むすび
白木蓮にちちはは思ふ高曇り
春愁ひ鍵盤に指沈めぬて
椅子の背の高く垂直聖五月

桐の花

吉田陽代

身内のゐるここがふるさと春櫻
首筋を風にさらしてあたたかし
齒切れよき医師の言葉や桐の花
兄弟の原型ここに燕の子
一滴を大事に夫に新茶汲む
夏暁や秒針水の流れほどに

まばたき

樋口英子

初蝶の入り来て迷ふ鏡店
全身を鏡に入れて春惜しむ
考へてをり鞆をまだ漕がず
木曾谷の霞の端に遊びけり
目薬の一滴夏へまばたきす
蝶生れて信濃の山河改まる

潮鳴集



夏の扉

小嶋洋子

春愁やトレンチコートの内釘
夏近しエスカレーター交差して
永き日やパソコン起動の砂時計
真四角をよそほふハンカチと私
「ゆりかもめ」二重の扉開いて夏

白封筒

栗原公子

春惜しむ白封筒にルームキー
ふがふがとオルガンの鳴る聖五月
息苦しきままで一面芝桜
音軽ろし絵踏なき世のハイヒール
花吹雪はなに隠るる遊びせむ

野の匂

大沢美智子

遠足の先頭太平洋に出る
廃校の足踏みオルガン蝶の昼
村ちゆうの守りて武尊の桜咲く
ぼうたんや寺は大戸を開け放ち
路刈つて身ぬち一日野の匂

借老

鈴掛

穂

うさぎ抱くための子の列山笑ふ
金槌で押へる伏図春疾風
も一人のおのれがぬつと目借時
薬師寺の二仏を拝し春惜しむ
借老は富貴にまさり桐の花

おぼろ濃くして内定の一慶事
 黒といふ性根をもちて兜虫
 いちだんと高層すすみゐて海市
 雲雀落つオゾンホールに触れたるか
 つばくらめ農衣翼のごと干さる
 師碑へ鍵あけて信濃は花のとき
 戸隠は神の男峰ぞ雪解晴
 椅子の背の高く垂直聖五月
 身内のゐるここがふるさと春櫛
 考へてをり鞦韆をまだ漕がず
 春愁やトレンチコートの内釘
 廃校の足踏みオルガン蝶の昼
 春惜しむ白封筒にルームキー
 うさぎ抱くための子の列山笑ふ
 レコードの終りは無音昭和の日

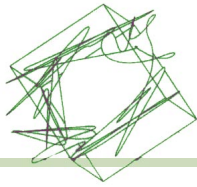
大畑 善昭
 松本 圭司
 北川 英子
 上谷 昌憲
 藤森すみれ
 千田 百里
 遠藤真砂明
 荒井千佐代
 吉田 陽代
 樋口 英子
 小嶋 洋子
 大沢美智子
 栗原 公子
 鈴掛 穂
 林 昭太郎


沖

の

水

脈

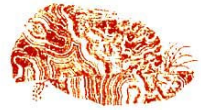


能村研三推薦・今月の30句

駅薄暑竜巻状の夕刊紙
押し続くリセットボタン暮の春
遠足のおとな集まる銀の鈴
春嶺を重ねて水の信濃かな
わたくしに戻りつつあり昼寝覚
店頭へはみ出すギター五月来ぬ
緑濃く我が身は薄くなりゆけり
垂直は一途のかたち滝しぶき
絵馬はみな屋根持つ形風五月
剣道の強豪校の桜かな
遠足の子に搾乳の白しぶき
五月富士端正にして大いなる
海を見に首夏の自転車ロードかな
地靄たちをり一村の荒鋤田
白河は奥のとば口春霞

高木 嘉久
小松 誠一
篠藤千佳子
鈴木夕起子
大川ゆかり
五十嵐章子
菅原 健一
宮島 宏子
齊藤 實
小林 奈穂
井原 美鳥
くらたけん
諸岡 和子
梶川智恵子
佐川三枝子

沖作品



能村研三選

春昼の家並かき分け荒川線

五十嵐章子

樟の木の天辺ゆらぐ巢立ちかな
店頭へはみ出すギター五月来ぬ
移動カフェ今日マロニエの花の下
夕桜黒塀長き記念館

東京

菅原 健一

蚕豆を皮ごと食すやうに生き
卵の花腐し右手は右の手を知らず
白薔薇の恋情といふ秘密かな
緑濃く我が身は薄くなりゆけり
戦争を捨てられぬまま亦麦秋
杖とれて二歩が二十歩豆の花
花冷やしヨパン弾く手の灰白く
深おじぎして白れんの暇ごひ
夏めくや三面鏡にひかり跳ね
垂直は一途のかたちち瀧しぶき

神奈川

宮島 宏子

浮き上りさう花過ぎの播磨坂

東京

齊藤 實

口取りの八寸春の盛られける
聖五月木戸の音立て蝶番
薫風や木で作りたる果実箱
絵馬はみな屋根持つ形風五月
剣道の強豪校の桜かな
タクシーを待たせてつくし摘みにけり

長崎

小林 奈穂

目の覚めしよりの俯せ春の雷
勘定は今も算盤種物屋
帆船の名は「あこがれ」や夏に入る
種蒔くやまずひんがしに一礼し
愛林日小鳥の切手シート買ふ
遠足の子に搾乳の白しぶき
柿若葉うから三軒庭つづき
かんがへのつと立ちあがる青嵐

千葉

井原 美鳥

沖作品 15句選評

*

能村研三

店頭へはみ出すギター五月来ぬ

五十嵐章子

ギターは楽器の中でも一番庶民的かも知れない。クラシック音楽で使う、ヴィオリンやチェロだと少し仰々しくなるが、ギターだと一人でも気軽に演奏できるから一時代前の若者たちにも人気があった。五十嵐さんや私の年代だと、学生時代はフォークソングブームでギター片手に街角でも若者の声が響いた。掲句御茶ノ水あたりの学生街の楽器屋さんであろうか。新学期も一カ月が過ぎ、そろそろ学生生活も落ち着きを見せる頃、若者たちもギターが欲しくなる頃なのかもしれない。青春の明るさを感じさせる句である。

緑濃く我が身は薄くなりゆけり

菅原 健一

若葉の緑もやや時が過ぎると、緑が濃くなって枝葉も重なりあい夏の光はみなぎる命を感じさせる。夏になると目に見えて

あたりのものが色彩を帯び、木々の緑はやさしい艶を加えてきて、風にも何か澆刺とした色を感じる。もっと若い時代は、この季節の澆刺さに呼応する対応力があつたのだが、齢を深めると共に何か心の中までも薄められていくのを感じた。

垂直は一途のかたち澆しづき

宮島 宏子

この句を読んでいて、宗左近先生が作った「市川讚歌 透明の蕊の蕊」の一節を思い出した。「曙 いま 世界が垂直」垂直というどちらかと言うと物理的な用語を見事に詩の世界に誘引したのである。宮島さんの句も、垂直に落ちる澆を詠んだものだが、その姿はけがれない一途のかたちであった。

絵馬はみな屋根持つ形風五月

齊藤 實

絵馬とは、広辞苑によると「祈願または報謝（祈願成就のお礼）に社寺に奉納する絵の額、上部が屋根形で、馬または木馬を奉納する代りに馬の絵を書いた」といわれる。通常は五角形（家型）をしているが、立派なものは板の上に屋根をつけているものもある。二月頃受験の祈願で掛けられたそれぞれの絵馬も、その願いが適ったかどうか判らないが五月の風に等しく吹かれている。（以下略）